

石川・富山の仏壇は鏡のような光沢を持った箔押し仕上げで知られてきた。仏壇の正面に人が立つと、その人の姿がくっきりと映し出される程の光沢と艶だが、最近では艶消しの箔押し製品が増加し、艶と光沢のある箔押しはあまり見られなくなった。

今回、次回と紹介するのは鏡面のような艶と光沢を持った箔押し技法。取材協力は北島仏壇店（石川県・美川仏壇）

連載・表現される箔(6) 「艶押し(1)」



(1) 箔下漆は日本産漆。希釈して用いる。



(2) 真綿で漆を伸ばして行く。鏡面のような光沢を得るために前工程の塗り部分（漆仕上げ）は呂色により磨き上げられている。箔押しを鏡面に仕上げるためには箔を押す面の光沢と拭き上げの技術がポイントとなる。



(3) 漆の拭き取りを始める。蛍光灯の映りから、漆が残っていることが分かる。

連載・表現される箔(7) 「艶押し(2)」

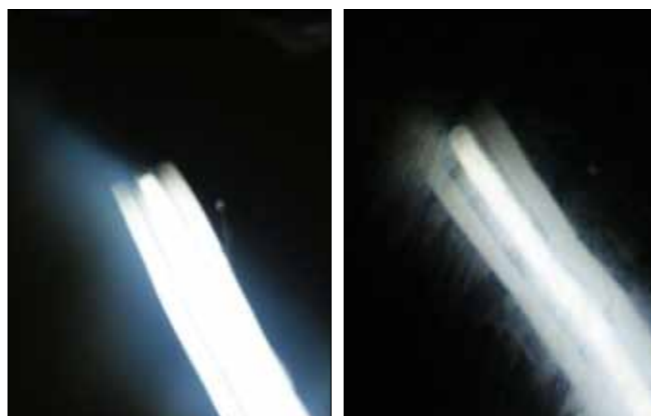
今回も北島仏壇店（石川県・美川仏壇）での箔の艶押し工程の紹介。艶押しで仕上げる最大のポイントは、箔を接着するための箔下塗料すなわち漆やカシュー系塗料の拭き取りにある。艶押しの場合は箔下塗料を徹底的に拭き取る。逆に箔下塗料を残せば艶消し（重押し）となる。箔を押し技術は「箔下塗料の拭き取りの技術」により左右される。海外での量産型の金仏壇はカシュー系塗料を吹き付けた上から箔を押しするために拭き取りという作業がない。その手間と技術の差を評価できることが大切である。



(4) 箔下漆（日本産漆）の拭き取りを始める



(5) さらに漆を拭き取る



(6) 左が漆を拭き取った後、右は拭き取り前の写真では蛍光灯がすっきりと映っていることが分かる

連載・表現される箔(8) 「艶押し(3)」

今回も北島仏壇店（石川県・美川仏壇）での箔の艶押し工程の紹介。前回までは箔を接着する箔下塗料の拭き取りのことに記してきたが、拭き取りの技術こそが箔の表現を左右する。漆を箔下に用いる場合、季節によって乾燥の度合いが異なるために、季節や湿度・温度によっての漆の選択が必要になる。基本的には「その時に適した漆を供給する漆職人」の存在が大きい。一年を通じて、同じ色合い、同じ艶の箔仕上げを行うには、長い経験が必要となる。



(7) 縁付け箔を押し（置き）はじめる



(8) 手早く箔を押しに行く



(9) 艶押し箔の仕上がり直前 この段階で鏡面であることが十分に分かる

連載・表現される箔(9) 「艶押し(4)」

今回は北島仏壇店（石川県・美川仏壇）の箔の艶押し工程の最終回。仏壇店の中には艶押し金の箔を見たことがない、という人も多にいない。金仏壇で言えば艶押しは北陸を中心とした日本海沿岸部では一般的な仕上げ方法であったが、現在では大半が重押し仕上げ、つまり艶消しとなっている。時代の変化の中で艶消しが好まれるようになった、とも言われるが、箔の接着材を吹き付けそのまま箔押し方法は艶押しは表現できない。箔の接着材を拭き取る技量こそが艶押し文化を支えてきた。



(10) 真綿で軽く押さえた部分から鏡面となる



(11) 手前はまるで鏡のような艶仕上げ。周囲は箔の反射光で黄金に輝く。手間を掛けた仕事が黄金の輝きを生み出している。